

ホロコースト記念館で

「差別」と「偏見」について考える

広島県福山市には、ナチスによるユダヤ人虐殺を世に問う、ホロコースト記念館があります。第2次世界

反ユダヤ主義の伝統

大戦を通じて、組織的に人道を無視した悲惨な事件は、すでに「アンネの日記」や「アウシュビッツ収容所」などを通じて、世界中で紹介されてきました。ここホロコースト記念館は、1995（平成7）年に開館されました。この年は、戦後50年。アウシュビッツ収容所解放50年。またアンネの日記で知られるアンネ・フランク没後50年の記念すべき年でした。開館以来、各地から子どもたちなど多くの皆さんが訪れ、ホロコースト（ナチスによる大虐殺）の歴史を具体的に知り、それを通して平和の学びがなされてきました。

ヨーロッパでは、キリスト教の誕生の頃からキリスト教徒とユダヤ教徒との間に宗教上の確執が生まれ、中世ヨーロッパでキリスト教社会が誕生するなかでユダヤ人が就業面などの制限を受けるなど、民族的対立も生まれてきました。

改宗を拒んだユダヤ人がスペインから追放されたり、ヨーロッパ各地に居住するユダヤ人の強制的隔離も行われるようになり、1516年にはヴェネチアに最初のゲットー（ユダヤ人の強制居住区）が作られました。

追放政策の破綻から隔離へ、そしてアウシュビッツ絶滅収容所に代表される人権を無視した大量虐殺が実行に移されました。

ナチス・ドイツ政権下で行われたこと

平成19年10月には、新しいホロコースト記念館が開館され、面積も大きくなり、展示内容も充実しました。ここを訪れた子どもたちから大人まで多くの皆さんが、歴史を学び、差別や偏見のない社会・世界づくりに向かって行くことを願っております。

1933年から1945年まで続いたナチス・ドイツ政権下のヨーロッパでは、ただユダヤ人というだけで600万人もの命が奪われました。その中には未来に無限の可能性を秘めた150万人の子どもたちもいました。

ユダヤ人を救った日本人 杉原千畝

ちうね

このような状況下、リトアニアのカナウスに領事として駐在していた杉原千畝は、1940年8月31日の領事館閉鎖期限までの限られた時間のなか、ポーランドから脱出して来

た6000人のユダヤ人へ、日本への通過ビザを発行しました。杉原千畝がゲシュタポ（ナチス・ドイツ秘密国家警察）の危険を冒して発給した「6000人の命のビザ」によって救われた人々の働きかけにより、1985（昭和60）年1月にイスラエル政府より「諸国民の中の正義の人賞」が贈られました。

何を学ぶか

ホロコースト記念館を訪れ、長い伝統社会に起因する民族、人種、宗教という「差別」と「偏見」のなかで、ただユダヤ人であるというだけで大虐殺を受けたことを知りました。

このような理不尽で重大な過ちを政府が犯すとき、これを国民が認められた形になったことが、結果としてホロコーストを生んだことに気づかされました。私たちは民族、人種、宗教、性別、出身、文化、習慣、思想、信条、学歴などにとらわれずに、人権を大切にし、護り、尊重することが重要なことだと学びました。

【参考図書】

- ホロコースト記念館ガイドブック
- ホロコースト 芝健介著 中央公論新社
- 真相・杉原千畝 渡辺勝正著 大正出版